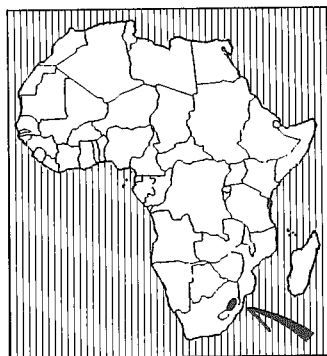


スワジランド 研修行



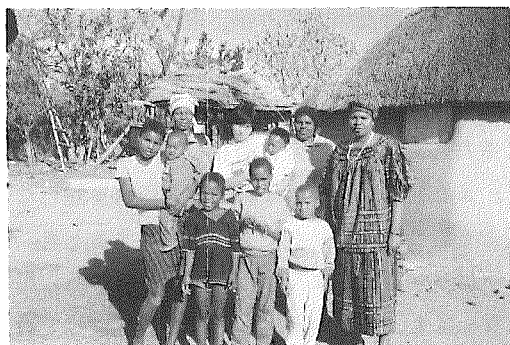
■■■■坂井真紀子

1 スワジランドへ

スワジランドから帰ってきて約4カ月、正直なところ私はまだあの国をどう腹の中で消化してよいのかわからないでいる。

スワジランドは、その面積は四国くらい、北南西を南アフリカに囲まれ、残る一方をモザンビークと接している。アフリカの地図を眺めていてもうっかり見落とすような小さな王国だ。しかし、そこに住むスワジたちは、南アフリカの黒人たちとも、ザンビアやジンバブウェの人たちとも異なる独自の文化と生き方を持っている。思っていた以上に奥が深いのだ。

私が昨年7月、8月とスワジランドの田舎に滞在することになったのは、アジア学院でテレサ・チャさん（通称ママチャ）と出会ったのがきっかけだった。アジア学院は正式名称をアジア農村指導者養成専門学校といい、アジアやアフリカの農村のリーダーを研修生として受け入れ、キャンパス内での有機農業や畜産の実習などを通してリーダーシップを学んでいくという所だ。ママチャは当時52歳。私の3倍は優にある太った体をゆすっては、にっと笑った顔がチャーミングだ。彼女は5年前に初めてアジア学院に研修生として来日し、



チャさん一家と筆者

野菜を自分の手で作ることを知った。しかも、化学肥料も農薬も一切なしでだ。これなら、自分の村の女性たちも自宅を始められる。彼女は帰国後さっそく家の一角にマンゴーやパパイヤの果樹を何本も植え、その日陰を利用して野菜作りを始めた。すぐ実行に移す軽い身のこなしが彼女の身上だ。5年たって、今回研究科生（トレーニングアシスタント）として再びアジア学院に来て、彼女は私たちにスライドで畑や果樹の様子を披露してくれた。大きなキャベツ、鈴なりの真っ赤なトマトは私たちがあっと言わせた。彼女の話では、この土地は固い岩盤のようで、水の不足が深刻とのこと、いったいどうやって育てているのだろうか。彼女は

ひかえめに「まだこれは実験段階。水の確保ができれば、村の他の家でも野菜を作れるようになるのに」と言う。彼女の心の中にあるのはいつでも、村のこと、女性たちのこと、そして家族のことだ。私はすっかり彼女のパワーに魅せられた。そしてその元気の源スワジランドに行くことに早々と決めてしまった。

2 スワジでの暮らし

ママチャの家はゲベニという村にある。都市とはいっても日本の駅前商店街ほどの規模しかないマンジニから自動車以南東に約1時間、大きな白人農場の中のデコボコ道を突切った先にある。ゲベニに着いて初めて、緑のまぶしい白人の所有する地域の方が特別なのだと気づく。それに比べたらあまりにゲベニの風景は荒々しく殺風景だ。

ママチャは自分の地域をRural（田舎）と表現するが、私はその景色を見て納得がいかなかった。何しろ緑がかけらもないのだ。一面青い空と、赤茶けた岩盤のように固い地表が起伏をなして連なっている。日本人が“田舎”と言う時イメージするのは、まず農業が営まれていること、自然の山や川が保たれていること、生気を取り戻す“緑”のイメージだ。これに対してゲベニはどう見ても荒野だ。だが、こんなに乾燥して荒れた土地でも人間と家畜が生きている。言葉にならないほどの驚きだった。

ママチャとバベチャ（バベは父の意、目上の男性に一般的につける尊称）の家は、10人以上の子供、甥、姪、孫、それに息子夫婦らから成るアフリカの典型的大家族だ。彼らは、この地を荒地から緑の林や野菜畑に変えていこうと動きだしたところだ。野菜畑も養豚もまだ自宅での実験段階だ。マンゴーやパイナップルなどの果物と野菜は主に自家

消費が中心だが、たくさんとれたときは村唯一の雑貨屋に並べて格安で売る。近所の人たちはこれらの収穫物を他に買う場所がないので、雑貨屋かママチャの家までやってくる。

私は朝晩の豚の世話と昼間の畑仕事をやることになった。それまで気ままに一人旅をしてきた私にとって、毎日の肉体労働はしんどかったが、子供たちと一緒にやる作業は時間を忘れさせてくれる。子供たちは大切な労働力だ。5歳の女の子ノントなど、夕食のための鶏を勇ましくも一人で生け捕りにしてくれる。彼らには完全に脱帽だ。だが、遊びたい盛りの子供たちのこと、いつでも大人の言うことを聞くはずはない。ある日、7～8歳の男の子マンジ、ピギニーニと私の3人で豚舎の掃除をしていたとき、彼らの相棒ムクリーシが古タイヤを見つけ、中からボロボロのゴムチューブを取り出して持ってきた。彼らはもう豚などそっこのけでゴムチューブと木の枝を使ってパチンコを作り始めた。出来上がると私の目を盗んで一目散に走り出す。さっきまで隣の豚舎にいたと思ったのに。「ピギニーニ、マンジまだ終わってないぞー」と叫んでもあとの祭。彼らの走る姿はあつという間に豆粒ほどになった。ここでは地平線の先の先まで彼らの遊び場である。

ゲベニにあるものといったら、地域の人々がお金と体力を出し合って建てた小学校、ママチャの息子夫婦が営む駅の売店のような雑貨屋、それに診療所の三つだけだ。あとは、視界の果てまで、広い空とゴツゴツしたハゲ山だ。はじめの頃、私は無性に町に行きたくて仕方がなかった。何の用事があるわけでもないが、有り余る時間をウィンドーショッピングや喫茶店、本の立ち読みなどで、思い切り消費したい気持ちになる。こういうのを都会病というのだろうか。私の生まれ育った東京に比べて、ゲベニは信じられないほどシンプルす

ぎる。

この土地で彼らが何を楽しみに暮らしているかといえば、それは歌と踊りだ。夕方、それぞれの仕事を終えて家族が家に帰ってくる。夕食の支度が出来上がるまでのひととき、大きな鍋をかけた焚火の回りに思い思いに場所をとる。若い女の子グーグとシンディが手拍子とともに歌い出すと、小さい子供たちがそれに合わせて得意げにスワジの伝統的なステップを踏みならず。男の子たちは、木の枝でドラム罐や古タイヤをたたいてリズムをとる。私も一緒に輪に入るが、この直線的で単調なステップは端で見るよりかなり難しい。「マキ、そうじゃないよ」と笑われつつもめげずに続けると何とかさまになってきた。ふと空を見上げるともう満月が出ている。空気も冷たくなってきた。一日の終わりだ。

こうしてチャ家の生活のリズムに慣れると、私はあまり町へ行きたいと思わなくなった。そのうち日本へも帰りたくなるのではないかと少し不安になる。またいずれ東京のリズムを学び直さなくてはならない。

3 彼らの問題

豚の世話や畑仕事を毎日行なう一方で、バベチャはスワジランドの様々な地域の農業の現場を訪問する機会を作ってくれた。農民たちのプロジェクト。成功して順調にしているものあり、壁にぶつかっているものあり。植林プロジェクトのための育苗センター、女性グループの生活向上のプロジェクトなどなど。バベチャはキリスト教協議会の農業部門の主任で、毎日のように国中のいろいろな地域の農業プロジェクトを訪問し、ミーティングに参加し、指導を行なっている。私は彼の仕事の邪魔にならない範囲でお供した。

行き帰りの道すがら、彼は私にこの国に存在する一つの図式をよく話して聞かせてくれた。スワジランドの中にある白人と彼ら黒人の関係、そして都市と農村の関係。簡単にいえば、政府が外貨獲得のために白人優遇政策をとり、大企業を都市近郊に誘致するので、農村部の黒人たちは出稼ぎに出かけ、労働力が地元からどんどん流出するということだ。彼らはよく自国を“荒波の中の楽園”と表現するが、南アフリカとモザンビークに囲まれた小さな内陸国なので、スワジ政府は独立以来南アフリカの白人政府と友好関係を維持し、その経済を南アフリカに依存することで支えてきた。南アフリカや旧宗主国イギリスをはじめ欧米の企業と政府は合弁会社をつくり外貨の獲得を行なっている。

バベチャは、政府の一連の政策が“精神的植民地化”の上に成り立つものだと主張する。例えば、イギリスから独立して25年たった今も、彼らの単一言語シスワティでなく英語で教育が行なわれていること。そうして英語を受け入れる土壌を作った上で、次に国営テレビ局が好んで、BBCニュースや欧米のポップス番組、映画などを流すため、若者たちの欧米志向がエスカレートし、結果として皆が町に職を求めるようになる、などなど。確かにそう言われてみると、ゲベニの地域では、男たちは公共バスで約3時間かけてマンジニへ働きに行くか、もしくは白人農場で単純労働に従事している。しかもバベが言うには、白人農場主たちの黒人労働者の扱いは差別的で、彼らに農業の専門技術を取得させないようにしたり、養鶏の市場を独占して、黒人の地元のプロジェクトを閉め出したりしているという。

こうした図式を与えられると部外者は案外安心するものだ。目の前にあるいろいろな出来事を整理する箱をもらったのだから。この図式は、アフ

リカに限らずどこの地域にもあるお決まりのものではないか。だが、その時の私は、すっかりその枠組みイコールスワジランドだと思い、そこからはみ出たスワジ的な部分を意識の外に追いやって、そうして日本に帰ってきてしまった。都市と農村の格差などに少しでも触れた者には、非常に分かりやすい模型のように見えるのだ。

4 スワジたちのスワジ的部分

日本に帰ってきてスワジランドに想いをさせるとき、目に浮かぶのはそれでも、彼らが踊る姿だった。欧米化の波に飲み込まれつつあるとは到底考えられない、彼らの伝統に対する誇りの高さはいったいどう説明したらいいのか。

ある日、25歳の若き国王スワティ3世とどこかの国の政府高官の会談の様子がテレビのニュースで放映された。その場面を見て驚いたことには、背広姿の政府高官に対して、我らが国王は伝統衣装(上半身ハダカ、腰には獣の皮を巻き、頭に黒鳥の羽根を数本刺す)で登場したのだ。特別な場合ではない。公式な場では彼はいつもその出で立ちなのだ。したがって私は彼の洋服姿を見たことがない。スワジの人たちは、自分の国王とその伝統をこよなく愛している。子供たちは誰もが、スワジダンスをじょうずに踊りたいと思う。独立25周年記念式典に参列したとき、誰もが民族衣装を身につけ踊る姿は圧巻だった。うらやましく思った。私の知っている日本の踊りなんて東京音頭が関の山だ。

彼らの生活は決して豊かとは言えない。むしろ非常に厳しい。積極的に欧米との合弁企業を誘致した結果として、森林の乱伐、土壌流出などの環境破壊も深刻になってしまった。都市と農村の格差がひらき、農村が去年の早ばつで飢えて、アメリカから食料援助を受けたことも都市に住む者の

多くは知らずにいる。

しかし、たくさん抱えていることは事実とはいえ、彼らはどこかアレはアレ、コレはコレ、と深刻な問題を脇に置いて、目の前にある日々を生きることから一歩を踏み出そうとしているのではないか。

スワジランドを去る日、ママチャはスピーカーがガーガーいうラジカセでテープをかけてくれた。“Too Many People are Suffering”(あまりにたくさんの人々が苦しんでいる)という曲だ。南アフリカで人気のブルーのグループだそう。アフリカの悲惨な状況を訴えた歌だというが、そのコミカルなメロディと軽快なドラムのリズムはおよそ悲惨さとは無縁だ。だが、彼女はアフリカの現状を日本の人たちに知ってもらうために私にこのテープを持って帰ってほしいと言う。私は有り難くいただくことにした。ママチャと子供たち、そして私はこの曲を口ずさみながら、リズムに合わせて踊った。“Too many people, too many, too many,……”今思い出すと、あの情景は喜劇的一幕のようだ。思わず笑いがもれてしまう。

もちろん、この言葉だけなら、東京の本屋でも同じ文句が見つかるだろう。だが彼らは、厳しい事実と一緒に彼らの受けとめ方も土産にくれた。つらい状況をつらいと言って悲しむより、笑い飛ばしつつ、まず家で野菜でも作ってみようか、と前向きな一歩を踏み出す方がいいに決まっている。彼らは、荒波をかいくぐる小舟だけあって、私より数百倍もしたたかで、生きること慣れていて、いつになるかわからないが、今度ゲベニを訪れたときには、今よりずっと緑の土地が増えていることだろう。私は帰国後4カ月めにしてやっと自分の中で彼らと過ごした時間に色がつきはじめたと思った。

(さかい・まきこ/アフリカ日本協議会)